

【10月5日まとめ】

前回のまとめに関連して。どうしたら対話ができるか。対話の前提となる対立は、いかにして可能か。対話のみが哲学にふさわしいのか。

檜垣先生（以下H）：昨日の総合科目『『知ること』とは何か』で、例のごとく私語と死語について話をしたのですが、年々反発が強くなっている気がしますね。今までは、サンデル形式で対話を使って授業をしていたのですが、それだとなかなか上手いかなくなってきていて、授業の終わりで僕の言いたいことをば一っと、これじゃ伝わらないだろうなあと思いながらしゃべるといった感じになっていました。そこで、これじゃあだめだと、今年はまず言いたいことを一方的に伝えているんです。もちろん私語を3つのパターンに分けて話を進めたときなど、意見を求めることもしました。すると、最近の傾向として、話を理解していないと思えるような人こそが自信をもって発言するというようなことがあるんです。普通は自信がある人が質問するでしょう。そちらは減っているんです。

栗原さん（以下K）：でも、総合科目って、僕の頃から、「質問ありませんか」と聞かれても、質問も意見も出ることは無く、ただ一方的に授業が展開する、という感じだったと思うんですけど。

永延さん（以下N）：わかってると思っていたら、聞かなくてもいいと思っているんじゃないですか。

H：それはわかります。確かに、死語は昔からありました。わからないのは、自ら発言する人の意見が、見当違いというか、今の話聞いてました？と尋ねたくなったりするとか、そこわかっていないのなら、これまでの全部わかっていないでしょう、と言いたくなる様な意見だったりするということなんです。そういう発言ができるということは、その場の全員がわかっていないのかというと、そういうわけでもなく、わかっている人も居て、ただ、わかっている人は発言しない。わかっているにしても、疑問がまったく無い状態というのはありえないはずなんです。意見というのは、他の側面を切り捨てて一つの側面について述べているわけですから、切り捨てたものや切り捨て方は、当然問題になってきます。そういう死語は相変わらずなのですが、発言がまったく無いわけではなく、筋から逸れた発言（もちろん、ずっと対話を続ければ、有意義でない意見などないとは思いますが、時間の関係で困るような）、どうしてもそう思えてしまう発言だけはある、という感じにみえます。自分の思ったことや感じたことを本当にそのまま述べているだけ、という印象なんですよ。これは逆転現象なのでしょうか。

想田（以下S）：逆転が起きている、というわけではなく、先生が前提とするものが理解されにくくなっているということではないのでしょうか。私も、先生に散々見当違いだと言われた口なので、その学生さんには勝手に共感しています。その学生さんがどんな意見を言ったのかはわかりませんが、私なら、3つのパターンにあてはまるのがまず嫌だなと思ってしまう。それで当てはまらない外れたことを言って、それが独自性だと思うでしょう。「私

が発言した」という事実だけを覚えておいて欲しいだけで、内容に、肯定はともかく否定は当然求めているですし、もしかしたら、そもそも内容を問題にしていないのかもしれないです。

H：それ迷惑ですよ。何のために授業に出ているんですか。

S：いやもちろん今のは極論で、内容だって当然問題にしていますよ？ただ、思ったことや感じたことをそのまま述べているだけ、というのはその通りで、発言することによって、相手や自分が変わることを求めている。本当に、ただ発言という行為をしたいから発言しただけで、その意味で、内容にあまり意味はないということです。

N：発言しておけば、評価も悪くならないでしょうね。

H：いや、やっぱり、それ何のために授業に出てるんだって思いますね。変わることを求めないって、どういうことですか。

S：むしろ、変わりたくないという感じですね。それが独自性を持つことなんだろうって思っている。

H：独自性という言葉はよくないねえ。

S：個性という言葉を使うのはやめたのですが。本当は個性と言いたいところです。

H：個性はもちろんよくないし、独自性も危険な気がしますね。もう、そのでの言葉は全面禁止にしたらどうだろう。

S：やはり、これらの言葉は、相手の意見は自分の意見には関係ないと思わせるものでしょうね。国語や道德の授業の影響なのか、A君とかBさんとかCちゃんとかが意見を述べたとして、それらの意見に対して自分が賛成か反対かということももちろん大事なのだけれど、それ以上に、自分の意見をそれらの意見とは別に持つことのほうが大事なんだと、私は感じています。

N：確かに、そうした授業においては、まず自分の意見を持つべき、という強調はあったように思いますね。

H：観点別評価という奴でしょうか。僕らは反対したんですよ。だって結果はわかるでしょう。意欲を評価するって、授業中に何回手を上げたかとかで判断するんですか？そんなことしたら、裏表がある人間が、沢山出てきてしまうでしょう。事実、初対面はへこへこしているけど、いざ相手が自分の利益にならなくなると、関係を切ったり怒り出したりする。騙すなら最後まで騙せと思いますね。裏表のある人間は、昔からいました。自分がそうと自覚しているならいいんです。けれど、最近は、それも、こちらのせいなんですよ。 「お前らが二枚舌にしろって言ってたのに」という感じなんです。でも、少なくとも僕はそんなこと頼んでないんですよ。

S：おそらく、二枚舌とか裏表になっている、という自覚すらも無いんだと思います。意見に一貫性を求めるのは、相手に理性という共通のものを前提しているからなのでしょう。ですが、先生が例に出した場合の共通のものとは、おそらく、場の空気とかノリといったものなので、あちらとこちらで意見が変わっても二枚舌ではない。むしろ、一貫性が無く

で当然だろう、ということですね。話す内容に重点をおいていないわけです。

H：そういうのって、自己同一性が形成されずに不安定で、いつも不安ではないのですか。

S：不安です。だからこそ、『友だち地獄』のような本が出るのだと思います。それで、どうすればいいのか、ということなのですが、前回のまとめにも書きましたように、擬似的な共同体が必要になってくるのだと思います。

H：それで本当にやっていけるのでしょうか。共同体が自己同一性を保証できるのは、それがしっかり閉じているときです。誰も見捨てない、誰も追い出さないという閉じている状態が必要でしょう。擬似的な共同体はそうなっていますか？なっていないでしょう。ゼミで一緒になった人の面倒を、卒業後もみられるわけがない。唯一、そうなっているのは家族くらいでしょう。母親と意見が違ふ、息子と意見が合わない。だからといって面倒をみない、追い出そうとするということはないでしょう。関係の維持が大前提になっているわけです。まあ、最近は、家族も完全に閉じているのか怪しくなってきたみたいですが。

S：そういう共同体側の視点ではなく、あくまでこちら側の意識の問題です。どうすれば対立を我慢できるか、と考えたとき、目的のための共同体が出てくる。ノリではなく、目的を共通のものとするわけです。そこで、「この関係を絶ってしまったら他に行くところがない」と思うとき、対立も我慢して、異質な他者とも向き合えるのではないのでしょうか。

H：それは、麻薬の応急処置のような感じで、やはり根本的な解決にはなっていない気がします。

S：そうは言っても、檜垣先生のように、「対立自体に意味がある」とはなかなか思えないのですが。

H：「対立自体に意味がある」という強調の仕方ではなく、「対決することで深くつながることができる」ということです。コップと対決しようと思いますか？対立することで、対立している相手と自分が深くつながることができる。しかも、感情やノリではなく、言葉や内容で、理性的につながっているわけなので、この場だけではない、普遍性や永続性を得ることができて、安定することになるのです。こうしたつながりは、共同体が壊れ宗教が機能しない現代日本において最後の綱とも言えるべきものでしょう。もちろん感情によるつながりも、人間は否定することはできないでしょうが、それをやるならもっと濃厚にやらないと。

S：コップとは対立できないという話でしたけど、人間とだって、本当に対立できているのか怪しいものではないのでしょうか。私は自分のことで頭がいっぱいなので、相手の人格とか理性なんて、コップほどの現実性も持たないです。そうすると、「相手はコップではなく人間である」と思えるためには何をすればいいのか、という話なのですが。

H：「そう思えるために必要なものがある」というより、「相手はコップではなく人間だと思うから思う」ということです。異質な他者と向き合うのってそんなに難しいかな。

K：そのことは、前回の想田さんのまとめで、自分の考えと似ているなと思ったところに書いてありましたね。異質な他者と向き合うというのは、相手の異質さを認めるというこ

とです。自分だけが特別なのではなく、相手も自分も特別で同等なのだ、とは納得しがたいということではないでしょうか。ただ、想田さんのまとめでよくわからなかったところがあって、自分が特別であると思うことと、自分に価値はあると思うことは、どう関係しているのですか。

S：自分が特別だと思っているということは、自分自身に価値があると思っているということだと思います。自分を特別扱いするのは、自分にとって、自分が価値ある存在だからです。だから、他の人ではない自分に、おいしいものを食べさせるなど、いい思いをさせるわけです。そうした特別扱い、つまり、自分をえこひいきする根拠が、自分に価値があるという思いなわけです。

K：なるほど。

H：でも実際は、自分自身に価値などないし、自分をえこひいきする根拠なんてどこにもないというわけですね。

N：でも、誰でもえこひいきということはしているのではないですか。

H：そこは演習とつながりますね。えこひいきをしてもいい、つまり幸福を求めてもいいけれど、道徳のほうが優先される。義務のほうが大切だとわかって行為できる。そう思うことができるのが自分の価値ですし、ここでようやく特別という言葉も出てくる。「みんな理性的存在」という意味で特別な存在であり、かけがえのない存在ですね。自分はえこひいきもしていると自覚し、そして義務を自覚できる自分に、価値は見出せるわけです。

S：今の流れはよくわかったと思います。先ほどの対立の話とつなげて考えることができると感じました。私は、対立に耐えるためには、自分に自信がないといけない、どこかで自分の価値を信じていないといけないだろうとずっと思っていました。そして、その価値をどうしたら見出せるのかという風に考えていたのですが、事態はどうやら逆のようですね。相手と対立できるということによって、そうできる自分に価値があるのだ、ということだと理解しました。

H：そこにしか絶対的価値はないでしょうね。『道徳形而上学の基礎付け』の冒頭でも言っているように、善い意志とはそういうものです。

増田さん：「他者をコップのような道具だと思う」という話にまで戻るのですが、「他者は自分を映す鏡である」という言い方もしますよね。これも道具として見なしている人の考え方なののでしょうか。

S：その「他者は自分を映す鏡である」という表現は、聞く人によって、二通りに意味を持つと思います。私は、他者の言動を、本当に神経を張り詰めてうかがっています。これは、他者のリアクションが、即自分の評価、自分の価値であると思っているからで、その意味で、他者は私の評価を映す鏡なわけです。一方、リアクションという表現からもわかるように、自分の信条や前提を確かめるためには他者が必要です。この意味でも、他者は、自分がどういう前提を持っていたのかなどと、気づかせてくれる鏡なわけです。

H：理解が途中なんだけど、他者をあまりに異質に感じている人の気持ちを落ち着かせて、

他者を受け入れやすくするために、自己の延長としての他者を強調しているけど、結局鏡として他者を捉えたところで、異質な他者を感じることはないだろうということですか？

S：その話は後者としてはわかりますが、前者はそもそも相手の異質さなど感じていないと思います。ただ、結論は同じです。鏡だろうが、ものはもので、自己の延長、前者の場合は、自分がどういう人間なのか評価を決定するのが他者のリアクションなのだ、という意味での延長ですが、そういう風に他者を捉えている限り、異質な他者を感じるようになるとは思えません。

H：「評価」って危険な気がしますね。他に何か言いたい事はありますか。

佐藤さん：私語を3つに分ける話で、想田さんがどこにもあてはまらないものを言いたくなる、というのはわかる気がしました。私も、大学生になったら、そういうものなんだとわかりましたけど、やはり、自分の意見を用意されたものに当てはめるといふのには、抵抗を感じます。

H：でもそうしないと話が進まないでしょう。それにこの授業の場合は、流れと外れたことを言った人がいたので、そういう考えもあるかなと思って話を聞いてみると、流れと同じなのか何なのかもはっきりしないという有様だったんです。ところが、後になってから、「あの人の意見がよかった」という人が出てきたりしてね。それには、もちろん、その場でそういうべきだということを話しましたが、その人の意見もよくわからない。ただ合意したくないだけみたいなの。とにかく、最近、授業のかなり早い段階から、「意見を一つにしてしまおうとしている」とか「答えは一つではないでしょう」とか、必ず言われるようになりましたね。それはある意味ではそうだと思いますよ。でも、この問題のこの件に関しては、「そうだよな」と一つになる。一つを目指すことがとても大切で、そのために自分の身をけずるような思いをするわけです。あと、必ず言われるのが、「誘導に思える」というものですね。「答えがあるなら最初から示してください」と言われると、そういうことじゃないんだと思います。私はもちろん意見をもってるけど、反論に応えながら進めることに意義があるわけで。

佐藤さん：私も、哲学通論を受けてたころ、そう思っていたほうで、哲学は自分の意見を持つことだと思っていました。もちろん、カントのテキストをこうして読みすすめてみて、そうじゃないんだとわかりましたけど。たぶん、数学とかだったら一つを目指すことに抵抗はないでしょう。でも哲学にそういうイメージを持っていると、先生に自分の意見を誘導されているように感じるし、一つにすることにも抵抗を感じるのではないのでしょうか。

H：そこが問題ですよ。そこは同意できるというだけのことで、何か一つでも合意したら同じ価値観を持つと決まったわけではないのに。

佐藤さん：たぶん、哲学通論とか受ける人は、自分でも本とか色々読んでるので、自分の意見に、プライドってわけじゃないでしょうけど、そういうものを持ってしまうんじゃないのでしょうか。

H : いや、まさにプライドだと思いますね。密室の中で独自性を保っているんですね。もう小中高と、そういうことじゃないんだと繰り返し言うべきですし、幼稚園の頃から「他者と言葉を交わす」ということを教えるべきだと思います。そんな密室の中に居て満足できるんでしょうか。

S : 満足できていないですし、それは独自性とはいえないものだから不安定なんだと思います。密室とは、他者との関わりがないことのたとえですね。ある意見を一つになりえない私の独自な意見にしようとする、意見を純粋に保つ方向しかなく、他者の介入を拒むしかないわけです。

H : そこですね。欧米人もみんなが対話しているわけではなく、自己弁護ばかりしている人もいるし、自分が議論に弱いとわかっているから、とにかく謝らない人とかもいる。でも、自分の意見を守ろうとして、他者を拒むという人はいませんね。

S : もちろん他者を完璧に拒んでいるわけではないです。こうして授業に出ているわけですから。でもそれは、絶対に変わることのない自分の意見がまずあって、それに箔をつける程度の参加の仕方なんですね。他者とのやり取りがあっても、他者の意見としてではなく、自分の意見に飲み込んでしまう。他者の意見はスパイス程度の働きしかしません。

H : そういう人いますね。とても筋道だって意見を話せる人なので、対話をするだろうと思ったら、対話に参加しないんです。問題の外にいて、「こうも言える」と、問題を眺めているだけなんですね。

S : 「それもその人なりの参加の仕方だ」とまとめたりはしないんですね。

H : まあね。そうとも言えるけど、でもこの授業に関しては、対話という参加の仕方を求めているわけだから。

K : それに、対話によって自分の意見が変わることこそ、哲学の可能性があるんだと思いますね。自分の意見が変わることこそ、哲学の醍醐味です。

S : 対話をしない哲学は、単なる知的ファッションということですね。

K : そう、それは哲学とはいえないと思います。

H : 「自分の意見が変わる可能性がある」というのは、確かに哲学の可能性でしょうね。

S : うーん。変わることがよいことばかりだとは言えないと思うので、自分の意見は他者の意見によって変わるものではないし変えたくもない、と考える人にとっては、言葉は悪いですけど、大きなお世話ではないですか。「あなたのやっていることは哲学ではない」と言っているわけで、そういうのは、前提を共有できない人へのおせっかいという気がしてしまうのですが。

H : 本当に、単なるおせっかいなのでしょうか。

佐藤さん : 私と一緒に哲学通論を受けていた友人は、閉じこもっているというわけではないのですが、檜垣先生の授業は絶対取らないと言っていましたね。私が今年も檜垣先生の授業を取っていると話すと、よく取るね、と言われました。檜垣先生の授業は大変なところはありますし、一年の時には正直よくわかりませんでした。やはり、対話とい

うのは大事なことだと思います。

H：確かに、一年生の頃のあなたの様子を見ていたら、その友人のようなパターンになるのかと思っていましたが、ここに来ているんですよね。そう、こういう人がいるから面白いんですよ。やっぱり、来年も、哲学通論と西洋思想と両方担当しようかな。独自の世界に閉じこもったプライドの塊のような人たちの負担にならないように、対話形式を少し弱めて。西洋思想は今までどおりに進めて、哲学通論は対話でやらないで知識の伝達に専念する。毎回課題を出して、試験はその課題の中から二題選ぶという風にする。評価は厳しくしますが、何が出るかはわかっているわけです。どう思いますか。

S：私は、哲学通論が対話形式でなくなるというのは残念な気がしますね。私は1年生の時には史学専攻希望だったので、西洋思想をとることはなかったでしょう。そうすると、対話というものをすることもなく、おそらく哲学コースに来ることもなかったと思うので。それに、1年で対話形式ではない哲学通論に出て、2年から演習や特講のようなゼミに参加するとなると、かなり戸惑うのではないのでしょうか。

H：そうも思ったんですよね。専門知識が得られなくても、対話に親しんでおくほうがいいのでしょうか。

S：そう言われると、1年で専門知識を獲得しておく、2年からのゼミは「それをいかしてさらに理解を深めるため」という目的の設定がスムーズに行くような気がしますね。ただ、専攻の違う人が対話形式に触れる機会は、やはり哲学通論ではないのでしょうか。

佐藤さん：確かに、哲学通論は全学の教職科目ですものね。

S：哲学通論を知識伝達でやるにしても、対話についてはふれて欲しい気がしますね。それに、対話形式を少し弱めるという話でしたが、弱め方も問題でしょう。表現をやさしくすると言うよりは、先生が前提としていることを、懇切丁寧に示してあげるという姿勢のほうが必要な気がしますね。

H：対話にはどうしたって触れることになるでしょうから。僕の前提としていることって、例えば何ですか。

S：やはり一つは、問題の枠に当てはまることを言っても、独自性はなくなるんだということ、人と話しても独自性はなくなるんだということでは。それから、この授業では、一つのものを目指すことで、やさしい人間関係とは違う関係を作ろうとしているのだ、ということではないのでしょうか。言い方に配慮するのは後で良いというか。

H：そう思って「私語と死語」を読ませたりすると萎縮しちゃったりね。言い方の配慮が必要なときはあるでしょう。冗談が混じった話もいい。ただし、内容に関しては真理を目指して、やさしい人間関係のような馴れ合いにはならない、ということなんです。

S：「真理を目指すのが誘導に思える」というのは、やさしい人間関係を前提としていますね。それと、言い方に配慮するとかオブラートに包むというのも、相手のためというよりも、対立が明確にならないで自分が楽、というだけな気がします。

H：本当に楽になっているんでしょうか。対立を避けても問題は残ったままですよ。

S : そうですね。対立が明確にならないでその場は楽だけれど、後で行き詰るということになりそうです。